

日本語版 Brief Experiential Avoidance Questionnaire (BEAQ) の開発

坂口 龍也¹⁾・瀬口 篤史²⁾・三田村 仰³⁾

(立命館大学大学院人間科学研究科／博士課程後期課程¹⁾・

西知多こころのクリニック／心理士²⁾・

立命館大学総合心理学部／准教授³⁾

BEAQ は、AAQ-II に比べ、精神的不健康との弁別力を高めた体験の回避の尺度である。本研究の目的は日本語版 BEAQ の開発であった。研究 1 では、大学生・大学院生 200 名のデータを基に、因子分析および相関分析を用いて妥当性を検討した。研究 2 では、新たなサンプルを基に再検査信頼性を検討した。研究 1 の結果、日本語版 BEAQ は 1 因子構造と想定されたものの適合度は十分でなかった。日本語版 BEAQ、精神的不健康 (K10)、AAQ-II、BADS-SF を用いた相関分析および探索的因子分析の結果、仮説通り、日本語版 BEAQ は AAQ-II と比べ、K10 からより離れた体験の回避を測定していることが示唆された。研究 2 の結果、日本語版 BEAQ の信頼性は十分であった。AAQ-II では苦痛な体験、日本語版 BEAQ では回避行動、というように、測定している EA にそれぞれでニュアンスの違いがあることが議論された。以上より、日本語版 BEAQ は妥当性についての課題が残るものの、AAQ-II との併用などでよりの確に EA を捉えることが可能になると考えられた。

キーワード：体験の回避、AAQ-II、妥当性、信頼性

立命館人間科学研究, No.47, 1-11, 2023.

I 問題と目的

1 体験の回避と精神的不健康の弁別

体験の回避 (Experiential avoidance : EA) とは、「個人が特定の私的事象 (身体感覚や情動、思考、記憶、行動傾向など) との接触を避けようとすることであり、こうした私的事象の形態や頻度を変えようとする、また、それらが生じる文脈を変えようとする」(Hayes, Wilson, Gifford, Follette, & Strosahl, 1996, p.1155) と定義される。EA は、アクセプタンス&コミットメント・セラピー (Acceptance and commitment therapy; ACT) というある特定の心理療法のモ

デルの観点から提唱された概念であるが、抑うつや不安の持続や不適応行動といった幅広い精神病理と関連がある汎用性の高い概念だとされている (Gámez et al., 2014)。

EA を測定する尺度として Acceptance and Action Questionnaire (AAQ) 及びその改良版の AAQ-II が開発されている (Bond et al., 2011)。AAQ-II は、EA の測定尺度として最も頻繁に使用されている尺度の 1 つである。一方、AAQ-II については弁別妥当性の低さが以前から指摘されている。このことから、AAQ-II が測定しているのは、ネガティブな感情状態 (うつ、不安など) やそれに関連した症状を中心とした、精神的な苦痛や不健康そのものなのではないか

との指摘がある (Tyndall et al., 2018; Wolgast, 2014)。つまり AAQ-II は、精神的な不健康全般をよく説明するものの、むしろそれらと区別するにはその相関が高過ぎるかもしれない。たとえば、Bond et al. (2011) によれば、AAQ-II は BDI-II と $r = .71$, Depression Anxiety Stress Scales (DASS) と $r = .49 \sim .61$, General Health Questionnaire - 12 (GHQ12) と $r = .30$, Global Severity Index of the Symptom Check - 90 - Revised (SCL-90-R-GSI) と $r = .70$ の相関係数を示していた。

2 Brief Experiential Avoidance Questionnaire (BEAQ) の開発

AAQ-II に代わる尺度の1つとして、The Multidimensional Experiential Avoidance Questionnaire (MEAQ: Gámez, Chmielewski, Kotov, Ruggero, & Watson, 2011) が開発されている。MEAQ は 62 項目から構成されるが、この短縮版として Brief Experiential Avoidance Questionnaire (BEAQ: Gámez et al., 2014) も開発されている。MEAQ および BEAQ もまた AAQ-II に次いで頻繁に使用されている尺度である。

Rocheftort, Baldwin, & Chmielewski (2018) による 1,416 名を対象とした因子分析を用いた検討によれば、AAQ-II の各項目は神経症傾向の因子に収まるのに対し、MEAQ (BEAQ) は別の因子を構成することが確認されている。なお、ここでの「神経症傾向」は Big Five の神経症傾向尺度および PANAS の否定的感情尺度によって測定されている。こうした先行研究の結果からは AAQ-II は精神的な不健康やより主観的な不快な体験を、一方の BEAQ はより EA そのものを測定している可能性が一貫して結論づけられており、BEAQ の有用性が指摘されている (Rocheftort et al., 2018; Tyndall et al., 2019)。

3 BEAQ の尺度特性

COSMIN (Consensus-based Standards for the selection of health Measurement Instruments) とは、専門家集団の合意によって形成された、健康関連の自己報告式のアウトカム尺度に関する指針である (Mokkink et al., 2018; 土屋, 2015)。BEAQ はアウトカム尺度ではなく、心理・行動的な問題が増強/減弱する過程を測定するプロセス尺度ではあるものの、COSMIN を参照することは有用だろう。COSMIN の分類に沿って現時点での BEAQ の特性について整理していきたい。まず、信頼性に関して BEAQ は、いくつもの研究で一貫して十分な Cronbach の α 係数が算出されており (e.g., Ong et al., 2020), 内的一貫性が確認されている。妥当性に関しては、BEAQ の各項目の選出・生成過程 (Gámez et al., 2011; 2014) から考えて「内容的妥当性」は適切と言えるだろう。「基準関連妥当性」に関しては、EA という概念自体に何らかの障害や症状を測定するようなゴールドスタンダードがあるわけではないため BEAQ には該当しない。「構造的妥当性」については、開発時は 1 因子構造とされていたものの (Gámez et al., 2014), 後の研究では 2 因子解を支持するデータ (Ong et al., 2020) や一因子で見た場合の因子負荷量の低い項目や適合度の低さの指摘 (Byllesby, Stayton Coe, Dickstein, & Chard, 2020) などもあり、結果は一貫していない。加えて、項目反応理論 (IRT) を用いて複数の集団のデータを比較した分析からも、適合度が低いという結果が得られ、BEAQ が一因子であるかどうか、および複数集団における得点の比較が可能かについて検討の余地が指摘されている (Ong et al., 2020)。関連して、「異文化間妥当性」の観点からは、現在 BEAQ はスペイン版、中国版も開発されている。スペイン版では探索的因子分析によって、英語オリジナル版と同様の 1 因子を確認している (Vázquez-Morejón, León Rubio, Martín Rodríguez,

& Vázquez Morejón, 2019)。中国版 (Cao, Mak, Li, & Leung, 2021) については、確認的因子分析の結果から、1 因子モデルではなく 2 因子モデルにおいて妥当な適合度であったと報告されている。英語オリジナル版における因子構造の不安定さは、異文化においても同様に生じていると考えられる。「仮説検証」に関してはすでに述べたように、相関分析および因子分析の結果から、BEAQ は AAQ-II と比較して精神的な健康とのより高い弁別力 (いわゆる「弁別的妥当性」) を持つことが確認されている (Rochefort et al., 2018; Tydall et al., 2018)。最後に、「応答性」に関しては、2,632 名を対象とした大規模な研究から確認されている。Thompson-Brenner et al. (2021) は、心理学的介入によって摂食障害患者における BEAQ 得点が、介入前から介入後および 6 ヶ月後のフォローアップにかけて減少することを確認した。また、この研究で得られた BEAQ の興味深い傾向として、介入前時点での BEAQ が高得点の患者ほど、通常の治療群よりも特別な介入群 (Unified Treatment) でより摂食障害の得点が改善されることが示されている。

4 BEAQ のもつ応用可能性

現時点での BEAQ の尺度特性に関しては、応答性が確認されているという点で一定程度の臨床的な有用性が期待できるものの、構造的妥当性については検討の余地があるといえる。しかしながら、AAQ-II においては弁別的妥当性の問題が依然解消されておらず、EA という概念について研究を進める上では、BEAQ には有用性があるだろう。たとえば、MEAQ を用いた研究ではあるが、Lewis & Naugle (2017) は、幼少期のトラウマ歴が EA を媒介して PTSD 関連の症状を説明するというモデルを検証している。その結果、AAQ-II よりも MEAQ の方がより妥当な媒介変数である可能性が示唆されている。

こうした研究例からも、EA に関する研究において BEAQ は AAQ-II を補完しうる尺度であると考えられる。

本研究では日本語版 BEAQ の開発を目的として、2 つの研究を行なった。研究 1 においては、「構造的妥当性」の検討を日本語版 BEAQ 項目についての確認的因子分析により行なった。さらに「仮説検証」に関して、日本語版 BEAQ と関連する他の尺度との相関係数の検証、および他の尺度項目と日本語版 BEAQ の項目を合わせた場合の探索的因子分析によって検討を行なった。また、「内的一貫性」に関して Cronbach の α の算出による検討を行なった。研究 2 においては、新たなサンプルを対象として 2 週間の間隔を空けての「信頼性」(いわゆる再検査信頼性) および「測定誤差」の検討を行った。

II 研究 1

1 目的

日本語版 BEAQ における「構造的妥当性」、「仮説検証」、「内的一貫性」の検討を行うことであった。

2 方法

調査参加者 大学生・大学院生 200 名 (男性 100 名, 女性 100 名, 平均 20.84 歳 ($SD = 1.67$)) を対象に質問紙調査を行った。尚、COSMIN では、因子分析を行う場合、少なくとも項目数の 5 倍かつ 100 以上のサンプルサイズを求めている。

調査の実施は株式会社クロス・マーケティングに委託 (オンライン調査) した。BEAQ の日本語訳は原著者の許可を得て、第 2・第 3 著者が独立に翻訳した。日本語訳の表現の違いなどを含め、第 1 著者を含めて協議の上、2 つの日本語訳を統合した日本語訳原案を作成した。その後さらにバックトランスレーションを経て、最終的な

日本語訳を作成した。

なお、本研究は「X大学における人を対象とする研究倫理審査委員会」の承認を得て実施された（承認番号：X）。

3 調査材料

1) 日本語版 BEAQ (15 項目) EA 傾向を捉える尺度であった。教示は「以下の各記述に対し、どの程度あなたが同意するかについて数字を選択してください」であった。回答は「1: 全くそうでない - 6: とてもそうだ」の6件法であった。合計得点が高いほど、EAの傾向が強いことを意味する。

2) Acceptance and Action Questionnaire-II (AAQ-II: 嶋・柳原・川井・熊野, 2013: 7 項目) EA 傾向を捉える尺度で、日本語版としては、嶋他 (2013) によって仮説検証、構成概念妥当性、信頼性 (内的整合性) が確認されている。「1: 全くそうでない - 7: 常にそうである」の7件法で、合計得点が高いほど、EAの傾向が強いことを意味する。

3) Kessler 10 (K10: 古川・大野・宇田・中根, 2002: 10 項目) 過去 30 日間の精神的健康度を捉える尺度で、「1: 全くない - 5: いつも」の5件法であった。日本語版としては、古川他 (2002) によって、ICD-10/ DSM-IV に関する構造化面接による結果との基準関連妥当性、信頼性 (内的整合性) が確認されている。合計得点が高いほど、精神的健康度が低いことを意味する。K10 は DSM 診断との確かな関連という点において、EA と DSM の観点からの「障害」との関連を検討するうえで適切と考えられる。

4) Behavioral Activation for Depression Scale-Short Form (BADS-SF: 山本・首藤・坂井, 2015: 9 項目) Kanter, Mulick, Busch, Berlin, & Martell (2007) は、行動活性化の標的となる行動を測定するために BADS を開発し、その後、短縮版となる BADS-SF (Manos, Kanter, &

Luo, 2011) が開発された。BADS-SF では、それぞれ行動的な側面から健康度を捉える「活動性尺度」(5 項目) と不健康度を捉える「回避尺度」(4 項目) から構成される。活動性尺度合計得点に回避性尺度を反転させての合計得点を合わせることで BADS-SF 総合得点を求めることもできる。日本語版としては、山本他 (2015) によって仮説検証、構成概念妥当性、信頼性 (内的整合性) が確認されている。「1: 全く当てはまらない - 6: 完全に当てはまる」の6件法であった。活動性尺度と回避尺度のそれぞれの合計得点が高いことは、前者においては活動性が高く健康的であること、後者においては回避の傾向が強く不健康的であることを意味する。尚、BADS-SF 合計に関しては、高いほど行動的な意味での健康度が高いことを意味する。EA が ACT のモデルから提唱された概念であるのに対し、BADS-SF はそれとは異なったモデル (行動活性化) に由来する測定尺度である。したがって、BADS-SF と BEAQ との相関を検討することで、やや異なった観点からも BEAQ が測定する EA の特徴を確認することができるだろう。AAQ-II の前身である AAQ を用いた研究によれば、AAQ と回避尺度とで中程度の正の相関 ($r = .41$)、AAQ と活動性尺度とで中程度の負の相関 ($r = -.37$) が確認されている (山本他, 2015)。

4 分析方法

1) 日本語版 BEAQ についての因子分析 「構造的妥当性」の検討の目的で、日本語版 BEAQ について因子分析を行なった。日本語版 BEAQ の 15 項目に対して主因子法による因子数の決定および因子負荷量に基づく項目の選別を行った。その上で、確認的因子分析による適合度の検討を行った。分析には R (lavaan package) を使用した。

2) 信頼性分析 「内的一貫性」を確認するため、日本語版 BEAQ 合計得点について Cronbach の

α 係数を算出した。

3) 相関分析 「仮説検証」の目的で相関分析を行なった。仮説として日本語版 BEAQ は、同じく EA の測定尺度である AAQ-II と中程度の正の相関 ($r = .50$ 前後) を示すと仮定された (仮説 1)。また、日本語版 BEAQ は EA の特徴として K10 との間に弱い～中程度の正の相関係数 ($r = .20 \sim .50$ の前後) を示すが、BEAQ の弁別力の高さゆえに、その絶対値は AAQ-II と K10 の相関係数よりは低いと仮定された (仮説 2)。仮説 2 に関しては、日本語版 BEAQ と K10、AAQ-II と K 10 の相関係数を算出した上で、両者について同等性の検定を行うことで検証する。また、日本語版 BEAQ は、EA とは異なるモデルを基に開発された BADS-SF との関連において回避尺度との間に、同じく広い意味での回避行動という意味で中程度の正の相関係数 ($r = .50$ 前後) を示すと仮定された (仮説 3)。さらに、EA の高さはその個人における有意義な活動を抑制する要因であると理論化されていることから、日本語版 BEAQ は活動性尺度との間に中程度の負の相関係数 ($- .50$ の前後) を示すと仮定された (仮説 4)。

4) 日本語版 BEAQ, K10 および AAQ-II の項目と合わせての探索的因子分析 「仮説検証」の目的で、日本語版 BEAQ, AAQ-II および K10 の全項目を用いて探索的因子分析を行なった。仮説として、2 因子解および 3 因子解で分析を行なった場合に、K10 項目と AAQ-II 項目が同一の因子に、日本語版 BEAQ がそれ以外の因子に分かれる傾向があると仮定された。ただし、この仮説については分析の結果から明確に「支持/不支持」を判断できるものではない。分析には R (lavaan package) を使用した。

5 結果と考察

1) 因子分析 日本語版 BEAQ の 15 項目に対して主因子法による因子分析を行った (Table

1)。固有値の減衰状況 (4.25, 1.58, 1.40, 1.18, 以下省略) を加味し 2 因子や 3 因子も検討したが、項目数が 2 以下になる因子が生じることや解釈上の困難さが生じた。したがって、最終的に英語版と同様の 1 因子構造 (Gámez et al., 2014) が妥当と考えられた。また、項目 6, 8, 11 の因子負荷量が .32 を下回っており低かったため (Tabachnick & Fidell, 2013), 以降分析から削除した。さらに、確認的因子分析を行った結果、適合度指標は $\chi^2 = 190.23$, $df = 54$, $p < .001$, GFI = .86, AGFI = .80, RMSEA = .11, CFI = .77 であった。尚、15 項目全てを用いた場合の適合度は、 $\chi^2 = 308.24$, $df = 90$, $p < .001$, GFI = .83, AGFI = .77, RMSEA = .11, CFI = .67 であった。豊田(1988)では、GFI および AGFI については .90 以上、RMSEA については .05 以下の場合に、当てはまりが良いとされるが、得られた値は十分な適合度に至らなかった。本研究では以降の分析において、因子負荷量の低かった 3 項目を削除した、12 項目からなる日本語版 BEAQ12 を用いることとする。

2) 信頼性分析 日本語版 BEAQ12, AAQ-II, K10, 回避尺度, 活動性尺度の各総得点及び Cronbach の α 係数を Table 2 に示す。日本語版 BEAQ12 において $\alpha = .82$ という十分な内的整合性が確認された。

3) 相関分析 日本語版 BEAQ12, AAQ-II, K10, 回避尺度, 活動性尺度の各総得点の相関係数を算出した (Table 2)。尚、参考のため BADS-SF 合計得点に関しても Table 1 に同様の情報を併記する。分析の結果、日本語版 BEAQ12 は AAQ-II との間に有意な中程度の正の相関 ($r = .62$, $p < .001$) を示し、仮説 1 は支持された。日本語版 BEAQ12 と精神的な不健康との関連に関して、日本語版 BEAQ12 と K10 との間には有意な中程度の正の相関が認められた ($r = .42$, $p < .001$)。さらに、AAQ-II と K10 の相関係数 ($r = .61$) と日本語版 BEAQ12 と K10 の相関係数 (r

Table 1 日本語版 BEAQ の因子負荷量と基礎統計

	<i>I</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	中央値	最頻値	歪度	尖度
1. 良い人生とは苦痛が全くない人生だ	.47	2.93	1.45	3	3	0.43	-0.56
2. どんな状況であれ、不安になるとすぐにそこから立ち去る	.65	3.21	1.15	3	3	0.20	-0.18
3. 嫌なことを思い出したら、その記憶を頭から振り払おうとする	.50	3.85	1.26	4	4	-0.21	-0.64
4. 自分自身の感情から切り離されているように感じる	.47	3.02	1.24	3	3	0.32	-0.38
5. もう絶対に取り組みまいといけないう時までやらない	.58	3.61	1.38	4	3, 4	0.03	-0.70
6. 恐怖や不安を感じても大切なことに取り組むことができる(逆転項目)	(.14)	3.53	1.12	3	3	0.13	-0.40
7. 嫌な気分にならないようにたくさんのことを諦める	.64	3.37	1.15	3	3	0.10	-0.15
8. 気持ちが動揺するようなことはめったにしない	(-.01)	2.99	1.24	3	3	0.19	-0.67
9. 自分自身がなにを感じているのかよく分からない	.48	3.38	1.26	3	4	-0.03	-0.66
10. 嫌なことはできるだけ後に回す	.62	3.95	1.21	4	4	-0.13	-0.45
11. 嫌な状況を避けるためにかなりの努力をする	(-.08)	3.64	1.06	4	3	0.15	-0.29
12. 辛い感情から逃れることが私の目標のひとつだ	.59	3.51	1.22	3	3	0.17	-0.57
13. 動揺した気持ちにならないように努力する	.37	3.65	1.12	4	4	-0.13	0.17
14. どうなるか分からないことはしない	.46	3.42	1.17	3	4	0.05	-0.25
15. 痛みを感じるといつも悩み苦しむ	.56	3.68	1.20	4	4	0.06	-0.37

Note. *I* = 項目 6, 8, 11 を抜いた場合の因子負荷量,

項目 6, 8, 11 の箇所(括弧内)に関しては全項目を用いた場合のそれぞれの因子負荷量。

項目 6 は逆転項目。各得点の範囲はいずれも「1-6」であった。

Table 2 日本語版 BEAQ12 と各尺度との相関および記述統計量

	Range	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>α</i>	日本語版 BEAQ12	AAQ-II	K10	BADS 合計	回避
日本語版 BEAQ12	17-67	45.20	8.91	.82	-				
AAQ-II	8-47	27.11	8.45	.86	.62***	-			
K10	11-47	27.08	9.10	.92	.42***	.61***	-		
BADS 合計	15-47	30.95	5.43	.66	-.27***	-.40***	-.37***	-	
回避	4-25	14.67	4.13	.77	.43***	.60***	.45***	-.65***	-
活動性	5-28	17.62	4.12	.84	.07	.07	-.03	.66***	-.14*
					<i>P</i> = .32	<i>P</i> = .32	<i>P</i> = .67		<i>P</i> = .049

= .42) について相関係数の同等性の検定をおこなった。その結果、K10 は日本語版 BEAQ12 との間に、AAQ-II との間よりも、有意に小さい相関を持つことが示され ($z = 2.58, p < .001$), 仮説 2 は支持された。また、日本語版 BEAQ12 は回避尺度との間に中程度の正の相関 ($r = .43, p < .001$) を示し、仮説 3 が支持された。日本語版 BEAQ12 は活動性尺度との間には有意な相関が認められず ($r = .07, p = .319$), 仮説 4 は支持されなかった。

4) 日本語版 BEAQ12, K10 および AAQ-II の項目と合わせての探索的因子分析 「精神的健康」, 「EA-I (AAQ-II)」, 「EA-II (日本語版 BEAQ12)」の 3 因子からなる因子構造を想定し、3 因子解での探索的因子分析をおこなった。その結果、K10 の 10 項目(因子負荷量は .57 ~ .85)のみからなる第 1 因子、AAQ-II の 6/7 項目(因子負荷量は .56 ~ .93) と日本語版 BEAQ12 の 5/12 項目(因子負荷量は .27 ~ .41) からなる第 2 因子、AAQ-II の 1/7 項目(因子負荷量は .41) と日本

語版 BEAQ12 の 7/12 項目 (因子負荷量は .32-.90) からなる第 3 因子に分かれた。尚、因子間相関 (r) は、第 1 因子と第 2 因子で .53、第 1 因子と第 3 因子で .37 で、前者は后者よりも 5% 水準で有意に大きい相関係数であった ($z = 1.98, p = .048$)。

Ⅲ 研究 2

1 目的

日本語版 BEAQ12 の再検査信頼性の検討を行った。

2 方法

大学院生 20 名 (男性 9 名, 女性 11 名, 平均年齢 23.40 歳 ($SD=1.83$)) を対象に, 日本語版 BEAQ12 を間隔を空けて 2 回実施した。間隔については, EA が比較的継続的な傾向であることを踏まえ 2 週間とした。各回, 参加者に対して質問紙と封筒を配布し, 参加者の回答終了後, 個人が特定されないよう封筒に入った状態の回答済み質問紙を回収した。参加者には, 調査者側が 2 回の回答結果を照合する目的で, 任意の ID (生年月日など) を生成させ 1 回目, 2 回目共に同じものを質問紙に記載させた。分析には R (lirr package) を使用した。

3 結果と考察

2 回実施された日本語版 BEAQ12 の得点間について級内相関係数 ("two-way", "agreement") を算出した。その結果, $ICC = .76$ ($p < .001$) が得られ, 再検査信頼性が確認された。さらに, Smallest Detectable Change (SDC) の算出 (de Vet, Terwee, Knol, & Bouter, 2006) を行なった。まず, 時期の誤差分散と残差の誤差分散を合計したものの平方根を算出し, $SEM=3.189$ を得た。次に, 「 $SEM \times 2$ の平方根 $\times 1.96$ 」によって, $SDC=8.84$ の値を得た。この値は, 日本語版

BEAQ12 において, 最低で 9 点の変化があれば臨床的に最小限の変化があることを意味するものである。

Ⅳ 総合考察

本研究では, 日本語版 BEAQ の開発を目的として, 妥当性および信頼性の検討を行った。研究 1 において, 確認的因子分析により「構造的妥当性」の検討を行った結果, BEAQ の開発時に想定されていた 1 因子構造 (Gámez et al., 2014) が適当と推測されたものの, 3 つの項目で因子負荷量が低く, それらを除いた日本語版 BEAQ12 を作成した。しかしながら, 日本語版 BEAQ12 においても適合度が十分とはいえなかった (例えば, Bond, F. W. et al (2011) の研究では, $\chi^2 = 38.70, df = 13, p < .001, NC=2.97, RMSEA = .06, SRMR=.04, CFI = .96$)。BEAQ の因子構造については, オリジナル版 BEAQ の開発を含めた先行研究においてその不安定さが指摘されており (e.g., Ong et al., 2020), 本研究での適合度の低さも, オリジナル版が抱える課題を再現している可能性がある。その点で, 日本語版 BEAQ12 の構造的妥当性についても, オリジナル版同様に議論の余地があると考えられる。BEAQ 使用にあたっては適合度の観点から単一で使用するのではなく, 他の尺度などと共に用い, 補完的な評価を行うことが望ましいと考えられる。一方で, 「内的一貫性」については本研究においてもオリジナル版同様に十分であった。

また研究 1 において「仮説検証」として, 日本語版 BEAQ12 と関連する他の尺度との相関係数の検証を行った。概ねそれぞれの仮説は支持されたが, 特に重要な点として, 日本語版 BEAQ12 は K10 と正の相関を持ちつつも, それは AAQ-II と K10 との相関よりは低いという仮説 2 が支持された。この結果は, BEAQ が精神

的不健康とEAとを切り分けて測定する上で、AAQ-II以上の有用性を持つことを示唆するだろう。尚、日本語版BEAQ12は活動性尺度との間には有意な相関が認められず、仮説4が支持されなかった。しかし、同時に、活動性尺度は、先行研究の結果(Kanter et al., 2007; 山本他, 2015)から考えて相関すると推測されるAAQ-II ($r = .07, p = .32$) およびK10 ($r = -.03, p = .67$)とも有意な相関が示されなかった。山本他(2015)はBADS-SFにおいて、回避行動や抑うつを測定する尺度との相関係数が想定よりも低かったことを報告している。活動性尺度の項目自体に測定上の課題が存在する可能性も考えられ、今後の精査が必要である。

研究1ではさらに、日本語版BEAQ12, AAQ-II, K10の項目を合わせて探索的因子分析を行い、3因子解で分析した結果、K10からなる第1因子、AAQ-IIを中心とした第2因子、日本語版BEAQ12を中心とした第3因子に分かれた。第2因子にまとまった項目内容にはAAQ-II、日本語版BEAQ12の区別なく、「苦(痛)」「感情」「心配」などの神経症的な傾向をより直接的に示す単語(Clark & Watson, 1995)が多く含まれており、「感情・苦痛因子」と仮に名づけることができるだろう。特にAAQ-IIにおけるこうしたワーディングの傾向は先行研究でも指摘されており、これがAAQ-IIと精神的な不健康の相関を過剰に高めていると指摘されている(Rochefort et al., 2018)。一方の第3因子での項目内容の特徴は、第2因子ほど直接的にネガティブな体験を記述しているわけではなく、むしろ回避している私的事象の内容があいまいである傾向があった。第3因子にAAQ-IIから唯一入ったのは「多くの人は自分よりもうまく人生と付き合っているようである」(AAQ-II項目6)で、これについても他のAAQ-IIの項目と比べて、何を回避しているかという対象が明確でない。また、因子負荷量の最も高い項目の内容は順に、日本語版

BEAQ項目10、日本語版BEAQ項目5、日本語版BEAQ項目7であり、先延ばしをはじめとした回避行動に焦点が当たっている。これらのようにBEAQが顕在的な行動に焦点を当てている傾向にあることはすでに先行研究でも指摘されている(Tyndall et al., 2019)。そこで、第3因子は「状況・場面の回避因子」と仮に名づけることができるだろう。また、得られた因子間相関からは、K10の因子に対し、若干ではあるが「感情・苦痛因子」が、「状況・場面の回避因子」よりも、より近い傾向を持つことが示唆された。このことから、AAQ-IIでは苦痛な体験そのものに焦点が当たっているのに対し、日本語版BEAQ12では体験の内容よりも回避している行動に焦点が当たっているといたように、測定しているEAについてのニュアンスに違いがあることが推測される。

ただし、研究1の限界として、相関係数の同等性の検定を用いた仮説2の検証については、単に日本語版BEAQ12の説明率が低かった可能性も考えられる。加えて、K10とAAQ-IIを含めての探索的因子分析という方法論に関しても、日本語版BEAQ12とAAQ-IIの差異を明確にするものとはなっていない。そのため、日本語版BEAQ12がAAQ-II以上の弁別的妥当性を持つかどうかについてはさらに検討が必要である。また、中国版(Cao, Mak, Li, & Leung, 2021)では2因子モデルが、スペイン版では英語オリジナル版と同様の1因子モデルを確認しており(Vázquez-Morejón, León Rubio, Martín Rodríguez, & Vázquez Morejón, 2019)、本研究の結果と異なっていることから文化的文脈や因子構造の不安定さを考慮した検討も望まれる。

本研究の研究2においては、2週間の間隔を空けての「信頼性」および「測定誤差」の検討の結果、日本語版BEAQ12はICC=.76という十分な信頼性を持つことが示された(Koo & Li (2016)の基準でいう「良い値(.75-.90)」。さ

らに、SDC を算出したことで、介入前後の日本語版 BEAQ12 の得点において、最低で9点の変化があれば臨床的に最小限の変化があったことを示唆する。加えて、本研究では研究1と2のいずれにおいてもサンプルが大学生に限定されている。EA は幅広い年齢で生じるため今後、より広い対象のデータを用いた追試も必要であろう。さらに、研究2の対象者数は先行研究 (Benjamin, Ida, Yngve, & Astrid, 2014 ; 嶋・川井・柳原・大内・齋藤・岩田・本田・熊野, 2017) と比較しても対象が少なく、今後、より多くのサンプルでの結果の再現を検証することが期待される。

概して、日本語版 BEAQ12 に関しては構造的妥当性についての課題が残るものの、AAQ-II との併用などでよりの確に EA を捉えることが可能になると考えられる。今後の EA 研究のさらなる精緻化が期待される。

引用文献

- Benjamin, H., Ida, S., Yngve, R & Astrid, B. (2014). Reliability and validity of the Norwegian version of the Disabilities of the Arm, Shoulder and Hand questionnaire in patients with shoulder impingement syndrome. *BMC Musculoskeletal Disorders*, 15, 1-7.
- Bond, F. W., Hayes, S. C., Baer, R. A., Carpenter, K. C., Guenole, N., Orcutt, H. K., Waltz, T. & Zettle, R. D. (2011). Preliminary psychometric properties of the Acceptance and Action Questionnaire-II: A revised measure of psychological flexibility and acceptance. *Behavior Therapy*, 42, 676-688.
- Byllesby, B. M., Stayton Coe, L. E., Dickstein, B. D., & Chard, K. M. (2020). Psychometric evaluation of the Brief Experiential Avoidance Questionnaire among treatment-seeking veterans with posttraumatic stress disorder. *Psychological Trauma: Theory, Research, Practice and Policy*, 12, 785-789.
- Cao, H., Mak, Y. W., Li, H. Y., & Leung, D. Y. P. (2021). Chinese validation of the Brief Experiential Avoidance Questionnaire (BEAQ) in college students. *Journal of Contextual Behavioral Science*, 19, 79-85.
- Clark, L. A., & Watson, D. (1995). Constructing validity: Basic issues in objective scale development. *Psychological Assessment*, 7, 309-319.
- De Vet, H. C., Terwee, C. B., Knol, D. L., & Bouter, L. M. (2006). When to use agreement versus reliability measures. *Journal of Clinical Epidemiology*, 59, 1033-1039.
- Gámez, W., Chmielewski, M., Kotov, R., Ruggero, C., Suzuki, N., & Watson, D. (2014). The brief experiential avoidance questionnaire: development and initial validation. *Psychological Assessment*, 26, 35-45.
- Gámez, W., Chmielewski, M., Kotov, R., Ruggero, C., & Watson, D. (2011). Development of a measure of experiential avoidance: The Multidimensional Experiential Avoidance Questionnaire. *Psychological Assessment*, 23, 692-713.
- 古川 壽亮・大野 裕・宇田 典英・中根 允文 (2002). 一般人口中の精神疾患の簡便なスクリーニングに関する研究 平成 14 年度厚生労働科学研究費補助金 (厚生労働科学特別研究事業) 心の健康問題と対策基盤の実態に関する研究 研究協力報告書
- Hayes, S.C., Wilson, K.G., Gifford, E.V., Follette, V.M., & Strosahl, K. (1996). Experiential avoidance and behavioral disorders: A functional dimensional approach to diagnosis and treatment. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 64, 1152-1168.
- Kanter, J. W., Mulick, P. S., Busch, A. M., Berlin, K. S., & Martell, C. R. (2007). The Behavioral Activation for Depression Scale (BADS): Psychometric Properties and Factor Structure. *Journal of Psychopathology and Behavioral Assessment*, 29, 191-202.
- Koo, T. K., & Li, M. Y. (2016). A Guideline of Selecting and Reporting Intraclass Correlation Coefficients for Reliability Research. *Journal of Chiropractic Medicine*, 15, 155-163.
- Lewis, M., & Naugle, A. (2017). Measuring Experiential Avoidance: Evidence toward Multidimensional Predictors of Trauma Sequelae. *Behavioral Sciences*, 7 (1). doi: 10.3390/bs7010009

- Manos, R. C., Kanter, J. W., & Luo, W. (2011). The behavioral activation for depression scale-short form: development and validation. *Behavior Therapy, 42*, 726-739.
- Ong, C. W., Pierce, B. G., Petersen, J. M., Barney, J. L., Fruge, J. E., Levin, M. E., & Twohig, M. P. (2020). A psychometric comparison of psychological inflexibility measures: Discriminant validity and item performance. *Journal of Contextual Behavioral Science, 18*, 34-47.
- Rochefort, C., Baldwin, A. S., & Chmielewski, M. (2018). Experiential Avoidance: An Examination of the Construct Validity of the AAQ-II and MEAQ. *Behavior Therapy, 49*, 435-449.
- 嶋 大樹・川井智理・柳原茉美佳・大内佑子・齋藤順一・岩田彩香・本田 暉・熊野宏昭 (2017). Acceptance Process Questionnaire の作成および信頼性と妥当性の検討 行動療法研究, **43** (1), 1-13.
- 嶋 大樹・柳原茉美佳・川井智理・熊野宏昭 (2013). 日本語版 Acceptance and Action Questionnaire-II 7 項目版の検討 日本心理学会第 77 回大会発表論文集
- Tabachnick, B. G., & Fidell, L. S. (2013). *Using multivariate statistics* (6th ed.). Boston, MA: Pearson.
- Thompson-Brenner, H., Singh, S., Gardner, T., Brooks, G. E., Smith, M. T., Lowe, M. R., & Boswell, J. F. (2021). The Renfrew Unified Treatment for Eating Disorders and Comorbidity: Long-Term Effects of an Evidence-Based Practice Implementation in Residential Treatment. *Frontiers in Psychiatry, 12*, 641601.
- 豊田秀樹 (1988). 共分散構造分析 入門編—構造方程式モデリング. 朝倉書店
- Tyndall, I., Waldeck, D., Pancani, L., Whelan, R., & Roche, B., & Dawson, D. L. (2019). The Acceptance and Action Questionnaire-II (AAQ-II) as a measure of experiential avoidance: Concerns over discriminant validity. *Journal of Contextual Behavioral Science, 12*, 278-284.
- 山本竜也・首藤祐介・坂井誠 (2015). Behavioral Activation for Depression Scale - Short Form (BADSF) 日本語版の作成と信頼性・妥当性の検討 認知療法研究, **8**, 96-105.
- Vázquez-Morejón, R., León Rubio, J. M., Martín Rodríguez, A., & Vázquez Morejón, A. J. (2019). Validation of a Spanish version of the Brief Experiential Avoidance Questionnaire (BEAQ) in clinical population. *Psicothema, 31*, 335-340.
- Wolgast, M. (2014). What does the Acceptance and Action Questionnaire (AAQ-II) really measure? *Behavior Therapy, 45*, 831-839.

(受稿日: 2022. 6. 16)

(受理日: 2023. 2. 11)

Original Article

Developing the Japanese version of the Brief Experiential Avoidance Questionnaire

SAKAGUCHI Ryuya ¹⁾, SEGUCHI Atsushi ²⁾ and MITAMURA Takashi ³⁾

(Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University ¹⁾ /

Nishitita Mental Health Clinic ²⁾ /

College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University ³⁾)

Scholars defined experiential avoidance (EA) as unwillingness to sustain contact with specific personal events such as distressing thoughts and emotions, among others. The Brief Experiential Avoidance Questionnaire (BEAQ) is a measure of EA with enhanced discrimination against mental ill health compared with the Acceptance and Action Questionnaire (AAQ-II). This study aims to develop the Japanese version of the BEAQ. In Study 1, we examine the validity of the instrument was examined using factor and correlation analyses using data from 200 undergraduate and graduate students. In Study 2, we verify test-retest reliability on the basis of a new sample. Study 1 demonstrates that although the Japanese version of the BEAQ was assumed to have a one-factor structure, the degree of fit was insufficient. Correlation and exploratory factor analyses using the Japanese version of the BEAQ, mental ill-health (Kessler Psychological Distress Scale [K10]), Behavioral Activation for Depression Scale-Short Form, and the AAQ-II suggested that, as hypothesized, the Japanese version of the BEAQ measures EA that is more distant from K10 than the AAQ-II. The results of Study 2 illustrated that the reliability of the Japanese version of the BEAQ was sufficient. Moreover, the study discussed nuanced differences in EA such as distressing experiences (AAQ-II) and avoidance behaviors in the Japanese version of the BEAQ. Finally, the study noted that the degree of fit of the Japanese version of the BEAQ was insufficient. Nevertheless, it proposed that the Japanese version of the BEAQ can more accurately measure EA in combination with AAQ-II. Additionally, the Japanese version of the BEAQ can be used for research and clinical practice related to Acceptance and Commitment Therapy.

Key Words : Experimental Avoidance, AAQ-II, validity, reliability

RITSUMEIKAN JOURNAL OF HUMAN SCIENCES, No.47, 1-11, 2023.
